

**記録と調査のプロジェクト
『船は種』に関する
活動記録と検証報告**

序 文

『船は種』とは、『種は船 in 舞鶴』（一般社団法人 torindo 他主催、2010～2012年、京都府舞鶴市）を対象に、記録と調査の方法を設計、実施、そして検証することを目的におこなわれたプロジェクトである。この設計・実施は、大阪を拠点に活動するNPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト (recip) を中心に編成されたチームが担った。またこの『船は種』は東京アートポイント計画Tokyo Art Research Lab (TARL) 『複合型リサーチプロジェクトの実践』の一部として実施されたものでもある。

recipは『船は種』の成果として、全9分冊からなる報告書および映像写真データを東京文化発信プロジェクト室とtorindoに提出した。そしてこのたび、調査にご協力くださった方々や関心のある方々とこの成果を広く共有するため、報告書を1冊にまとめ、新たに編集・校正を加えて発行することとなった。（元となる報告書の作成は2012年12月）一方、映像写真データについては、デジタルアーカイヴの実験が始まったところである。なお『複合型リサーチプロジェクトの実践』の全体像については、同時期に発行される検証パンフレットを参照されたい。

以下、本書の概要を記す。第1部は、recipチームがおこなった記録と調査のプロジェクト『船は種』の活動記録とその自己検証である。つづく第2～4部には、その『船は種』を通して収集されたさまざまな資料、データが収録されている。まず第2部は、本プロジェクトの軸となった舞鶴での「フネタネのつどい」に関するもので、1章は「フネタネのつどい」開催にあたって本チームが考案した各種フォーマット、2章はそこで収集された参加者の声＝「ふりかえるシート」の全テキスト

（原本から転記）、そして3章はその参加者2名が作成した個人年表（原本から転記。なお、「フネタネのつどい」ではこれらをもとに模造紙で「寄せ書き風 船ができるまで年表」がつくられたが、こちらは torindo 所蔵のため本書には収録せず）である。つづく第3部は『種は船 in 舞鶴』に対するアンケート調査の結果で、1章には「フネタネのつどい」参加者属性アンケート、2章には造船ワークショップと出港式での一般参加者アンケート、それぞれの集計結果を掲載している。そして第4部は、『種は船 in 舞鶴』および『種は船～航海プロジェクト from 舞鶴』関係者インタビューを中心とした、さまざまな人々の語りである。1章は本チームが実施した『種は船』関係者へのインタビュー、2章は torindo で続けられてきた対話、3章は第三者を含めた対談と報告会の内容をテキスト化したものである。さらに、末尾に「種は船」と「船は種」のポスター（縮小版／モノクロ）を収録している。

最後に、記録と調査のプロジェクト『船は種』にさまざまな形でご協力くださった方々に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

NPO 法人 地域文化に関する情報とプロジェクト (recip)
『船は種』チーム

目次

第1部 記録と調査のプロジェクト『船は種』の活動記録と自己検証

- 006 1章 はじめに
- 007 2章 記録と調査のプロジェクト実施概要
- 010 3章 当事者参加型・記録／調査プロジェクト『船は種』の設計と実施内容
- 022 4章 記録と調査のプロジェクト自己検証

第2部 『種は船 in 舞鶴』「フネタネのつどい」

- 028 1章 各種フォーマット
- 035 2章 参加者の声 — 「ふりかえるシート」全テキスト
- 044 3章 個人年表

第3部 『種は船 in 舞鶴』アンケート集計結果

- 048 1章 「フネタネのつどい」参加者属性アンケート
- 051 2章 『種は船 in 舞鶴』造船ワークショップ & 出港式 一般参加者アンケート

第4部 『種は船 in 舞鶴』と『種は船 ～航海プロジェクト from 舞鶴』をめぐる語り

- 076 1章 インタビュー
- 230 2章 対話
- 274 3章 対談と報告会

第1部 記録と調査のプロジェクト『船は種』の活動記録と自己検証

- 1章 はじめに
- 2章 記録と調査のプロジェクト実施概要
- 3章 当事者参加型・記録／調査プロジェクト『船は種』の設計と実施内容
 - 3-1 記録編
 - 『種は船』から『船は種』へ
 - フネタネスコープと「フネタネのつどい」
 - 記憶の海へ
 - 海から眺める
 - 3-2 調査編
 - 調査設計趣旨
 - 調査内容
 - さまざまな「語り」の顕在化
- 4章 記録と調査のプロジェクト自己検証
 - 4-1 設計段階（4～5月）
 - 4-2 実施段階（5～10月）
 - 4-3 実施後（10～12月）
 - 4-4 総括

1

はじめに

本プロジェクトの目的は、『種は船 in 舞鶴』に対する記録と調査の方法を設計し、じっさいにそのなかで実践し、検証をおこなうことである。

一般的に、アートプロジェクトにおいては多様な人々の参加やその終了にいたるまでの過程が不可欠だが、多くの場合こうした要素はほとんど可視化されない。「作品」として残るものを除き、そうした関係性や過程は、かかわった人々の私的な記憶にとどまっているのが現状である。昨今ようやくアートプロジェクトの記録や調査検証の重要性が指摘されるようになってきたが、これにはプロジェクトの現場のニーズの高まりだけでなく、事業主体（行政など）からの「評価」の要請が関係している。ただ、単年度で成果を求められることの多い事業評価の現状では、目に見えて残るものや数値化しやすい表層的なデータなどに注目が集まることとなり、結果としてアートプロジェクトをつくりあげた人々の関係性や記憶は、「記録」や「調査検証」という言葉のもとでも、なお埋もれたままとなってしまう。

そこで本プロジェクトでは、アートプロジェクトの当事者の手によって、さまざまな関係性や歴史、人々の記憶を前景化させることを主眼に置いた記録と調査の設計をおこなう。当事者によって集められたデータは、たんなるプロジェクトの記録調査という受動的・消極的な行為であることを止め、プロジェクト自体を構成する主体的・積極的な行為となるだろう。

この『船は種』は、『種は船』を契機にスタートした、もうひとつのプロジェクトである。

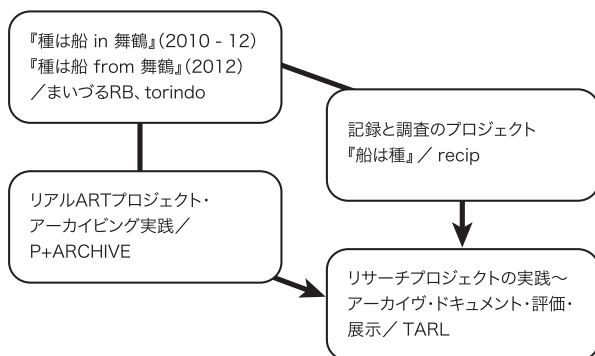
2

記録と調査のプロジェクト実施概要

■複合プロジェクト相関図

記録と調査のプロジェクト『船は種』は、『種は船』（一般社団法人 torindo / 以下 torindo と表記）を対象に、「複合型リサーチプロジェクトの実践」（Tokyo Art Research Lab / 以下 TARL と表記）との複合プロジェクトの一部として、「リアル ART プロジェクト・アーカイビング実践」（P + ARCHIVE）と並行して実施されている（図2-1）。

図2-1



* 『種は船 in 舞鶴』は2010～2011年度はまいづるRB、2012年度は一般社団法人 torindo の主催で実施。

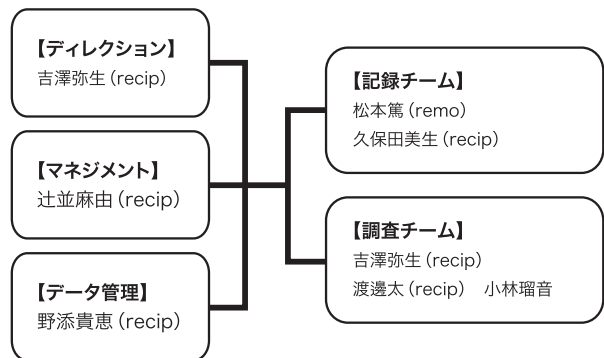
* TARL は東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が実施する「東京文化発信プロジェクト」の一事業。

■組織図

NPO 法人地域文化に関する情報とプロジェクト（以下 recip と表記）ではこれまで、アートプロジェクトの記録や公的文化事業の報告書作成をおこなってきた。また「コネクタテレビ」など映像番組の制作配信も手がけ、機材使用やデータ管理などのスキルも有している。一方、NPO 法人記録と表現とメディアのための組織（以下 remo と表記）は、映像を中心としたメ

ディア技術の社会化に、さまざまなアプローチで取り組んでいる。ミッションや趣旨は異なるものの、ともに拠点を大阪に置き、これまでも協同事業やメンバー同士の多様な連携プロジェクトを実施してきた。そして今回は recip の調査と記録に関する方法論をベースに、remo の有する映像に関する方法論を掛け合わせるという形で7名のチームを編成した（図2-2）。

図2-2



* recip = NPO 法人地域文化に関する情報とプロジェクト
2004年設立。「文化の地産地消」を掲げ、文化事業の企画運営、インターネット配信番組「コネクタテレビ」に代表されるメディア制作、文化事業やアートプロジェクトの調査研究、文化施設の管理という4つの柱で、多様な事業をおこなっている。

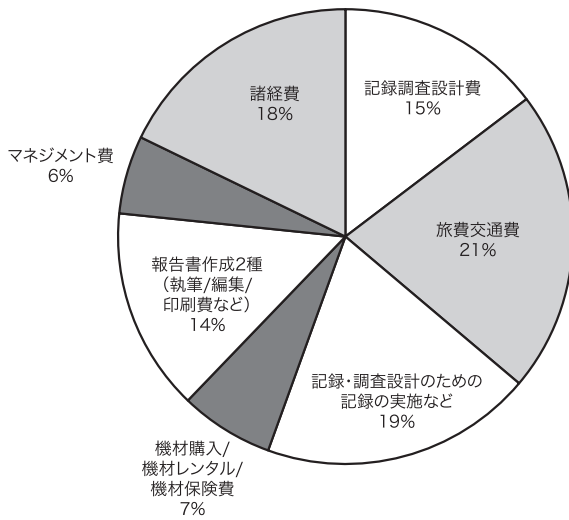
<http://www.recip.jp/>

* remo = NPO 記録と表現とメディアのための組織

2002年設立。メディアを通じて「知る」「表現する」「話し合う」の3つの視点で活動する。メディア・アートなどの表現活動を促すほか、文房具としての映像の普及、映像を囲む新しい場づくりなどをおこなっている。

<http://www.remoo.or.jp/ja/>

■経費内訳 (作業項目別)



■会議、ミーティング開催数

計13回開催 (参加のべ55名)。ただし会議記録のあるもののみ。また個別に開催されたものは含まれない。

場所	回数	のべ人数
recip	7	31
梅田	4	16
北加賀屋	1	5
三宮	1	3
計	13	55

■本チーム専用ML 投稿数

2012年12月末現在、1309通

■出張回数

合計58回実施 (参加のべ106名)。

【行き先別】

	のべ回数	のべ日数
舞鶴	47	82
小浜	2	2
金沢	2	2
富山	1	4
新潟	1	3
東京	5	13
計	58	106

【メンバー別 / 4~6月】

月	日	曜日	吉澤	久保田	松本	野添	小林	辻並
4	11	水	舞鶴	舞鶴	舞鶴			舞鶴
	20	金		東京				東京
	27	金	舞鶴	舞鶴	舞鶴	舞鶴		舞鶴
	30	月			舞鶴			
5	1	火			舞鶴			
	2	水	舞鶴		舞鶴			
	3	木	舞鶴		帰路			
	8	火	東京	東京	東京	東京		東京
	12	土	舞鶴	舞鶴	舞鶴			
	13	日	舞鶴	舞鶴	舞鶴			
	14	月			舞鶴			
	16	水	舞鶴		舞鶴			舞鶴
	17	木			舞鶴			
	18	金	舞鶴	舞鶴	舞鶴			舞鶴
	19	土	舞鶴	舞鶴				舞鶴
30	水			舞鶴				
31	木			舞鶴				
6	1	金	小浜		小浜			
	2	土	舞鶴	舞鶴	舞鶴			
	3	日	金沢	舞鶴	舞鶴			金沢
	4	月			舞鶴			
	11	月	東京					
	23	土		舞鶴	舞鶴	舞鶴		
	24	日		舞鶴	舞鶴	舞鶴		
	25	月		帰路	舞鶴			
	29	金	舞鶴					
	30	土	舞鶴		舞鶴			舞鶴

【メンバー別／7～12月】

月	日	曜日	吉澤	久保田	松本	野添	小林	辻並
7	1	日	舞鶴		舞鶴		舞鶴	
	2	月		舞鶴	舞鶴			
	3	火		舞鶴	舞鶴			
	7	土	富山					
	8	日	富山					
	9	月	富山					
	10	火	富山					
8	19	木			舞鶴			
	20	金			舞鶴			
	21	土	舞鶴	舞鶴	舞鶴			
	22	日			舞鶴			
	5	日	新潟					
	6	月	新潟					
9	7	火	新潟					
	25	土			舞鶴		舞鶴	
	26	日			舞鶴		舞鶴	
	13	木						東京
10	14	金	東京					東京
	15	土		舞鶴	舞鶴			舞鶴
	16	日		帰路	帰路			帰路
	7	日	舞鶴	舞鶴	舞鶴	舞鶴		
11	8	月		舞鶴	舞鶴	舞鶴		
	11	日	東京					東京
12	4	火	舞鶴					
	11	火						舞鶴

■フネタネのつどい（詳細は3章参照）

全7回（説明会を入れると計8回）開催、参加人数：134名

ふりかえるシート：65枚（→第2部2章）

参加者個人作成年表：2名分（→第2部3章）

寄せ書き風・船ができるまでシート（模造紙）：2回分

（torindo所蔵）

■映像（フネタネスコープ）・写真データ

総量：約570GB（recipチーム撮影分のみ）

■インタビュー調査

実施時間計：約21時間 ただし torindo側で実施したも

のは含まない

文字数：約22万5000字（→第4部1章）

	実施人数
5/18 舞鶴	1
6/1-3 小浜	2
6/1-3 舞鶴	1
6/3 金沢	1
6/29-7/1 舞鶴	4
7/8-9 氷見	2
7/27 東京	1
8/6 新潟	5
8/25-26 舞鶴	4
9/14 東京	1
9/15 舞鶴	1
9/28 京都	1
10/7 舞鶴	2
12/4 舞鶴	1
計	27

■アンケート調査

「つどい」参加者個人属性アンケート調査：18枚（→第3部1章）

造船ワークショップ（5月3～6日）および出港式（5月19日）

参加者アンケート：142枚（→第3部2章）

（1、2章 執筆 吉澤弥生・データ作成 辻並麻由）

3

当事者参加型・記録／調査プロジェクト『種は船』の設計と実施内容

3-1 記録編

『種は船』から『船は種』へ

本プロジェクトは、アートプロジェクトの現場における「記録」と「調査」の循環的生成の方法論を開発するとともに、『種は船 in 舞鶴』にその方法論を実装することを目的として2012年5～10月にかけて実施されたものである^{【*1】}。

現在、日本で展開されているアートワークにおいて、「記録」や「調査」といった営為はきわめて不安定な状況に置かれている。「ワークショップ」とよばれる手法や「参加型」といった形態が普及したことにより、「アートプロジェクト」型の取り組みが2000年代以降のアートワークのあり方のひとつとして定着していった。それに従って、<プロジェクトに関わる市民どうしのつながり>や、<市民がプロジェクトに関与するプロセス>を記録・調査することの重要性や需要がひろく認められるようになった。しかしその一方で、関係性や関与のプロセスを可視化するための記録・調査についての体系だった方法論の設計やワークフローの検討といった建設的な議論は、これまでほとんど蓄積されていない。結局のところ、汎用性のある記録・調査の「仕組み」やワークフローの構築までには至っておらず、プロジェクトに関わる一部のヒューマン・パワーに依存せざるをえない状況である。

本プロジェクトでは、いわば「宙づり」状態に置かれている「記録 record」と「調査 research」という行為を、1) プロジェクトのありようを他者に伝えるための素材をつくる「作業 work」であるとともに、2) 記録・調査という行為自体がプロジェクトに関与するきわめて能動的な「活動 action」である、と整理した上

で、1') 現場に関わる多様な人々の視点によるプロジェクトの記録・調査と、2') その成果物である写真・映像・テキストを「触媒 media」にした省察（ふりかえり）^{【*2】}の場の創出をめざした。

このことは、アートプロジェクトを創発させる源泉として絶対視されている「アーティスト」という存在を相対化させ、また、アーティストの創作活動とは別のところで生成している集団的創造のプロセスに目を向けさせるという意義をもつ。また、形をもつもの／形のみえるものだけをプロジェクトの成果とするのではなく、形をもちにくいもの／形のみえにくいものに輪郭を与え、それを価値あるものとして取り扱い可能にする意義をもつものとする。

フネタネスコープと「フネタネのつどい」

ここでは、本プロジェクトが設計・実践したフネタネスコープ及び「フネタネのつどい」（以下「つどい」と表記）について概説する。

○フネタネスコープ^{【*3】}

フネタネスコープとは、以下の3つのルールにのっとり撮影した映像群および撮影行為の総称である。誰でも簡単に撮影できるメソッドである。『種は船 in 舞鶴』の参加者（当事者）を対象に実施した。

【撮影のルール】

- 1) 三脚をそえて定点撮影
- 2) 最長およそ1分間
- 3) 撮影中のズームなし

【撮影するシチュエーションと対象】

撮影者の観点にそって撮りたいものを撮影^{【*4】}

ex) 会議／打ち合わせ／設営／イベント／日常の風景など^{【*5】}

○「つどい」

「つどい」とは、以下の3つのルールにのっとって鑑賞する「場」および鑑賞の仕組みの総称である。『種は船 in 舞鶴』の参加者(当事者)を対象に実施した。

【鑑賞するためのルール】

- 1) 「みんな」で観る
- 2) 撮影者は意図やエピソードを話し、鑑賞者は聞く(ロールプレイング)
- 3) ふりかえる

上記のフネタネスコープと「つどい」との一連のつながりを、ワークフローの観点から整理すると図3-1、図3-2(「フリカエル・サイクル」)になる。また、使用したツールと機材は以下の通りである。

図3-1 フネタネスコープと「つどい」

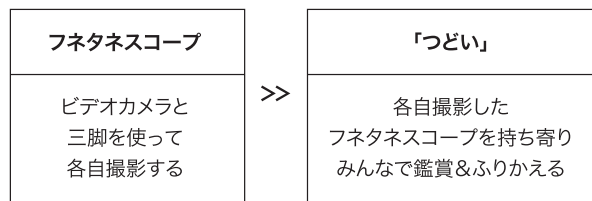
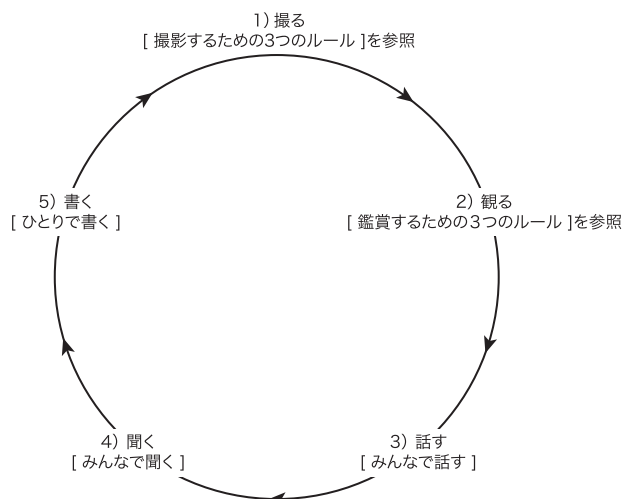


図3-2「フリカエル・サイクル」



○使用ツール3つ

- 1) ふりかえるシート(参加者が記入^{【*6】})

「つどい」ごとに実施した自己調査票(上記5)書く[ひとりで書く]部分)。

主な4つの設問:

Q「今日のつどいはいかがでしたか?」

Q「あなたが撮影したフネタネスコープについて、なぜそこを選んだのですか?また撮影してみてどんなことを思い出したり、感じましたか?」

Q「他人が撮影したフネタネスコープについて、印象に残っているものを1つ挙げてください」

Q「あなたにとって『種は船』といえば○○○という場所を思い浮かぶだけ書いてください」

- 2) 「つどい」開催記録(recipチームが記入)

「つどい」において、誰がどんな映像をとってきたのか、映像の上映中にどんな語りが生産されたのかを記録する備忘録メモ。毎回ごとに作成。

- 3) 「つどい」参加者属性アンケート(→第3部1章)

○使用機材

- 1) デジタルビデオカメラ 2台
- 2) デジタルカメラ 各人所有のカメラを使用^{【*7】}
- 3) 三脚 2脚
- 4) 記録媒体 SDカード適宜
- 5) パソコン 1台
- 6) プロジェクター 1台
- 7) データ保存用ハードディスク 2台(マザーとバックアップ)

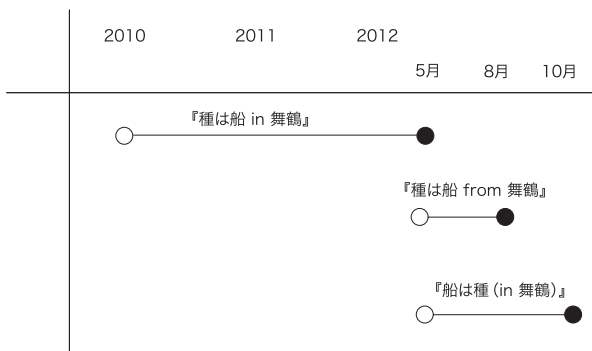
記憶の海へ

TANeFUNeが完成し新潟に向けて舞鶴を出航した(『種は船 from 舞鶴』)のと時を同じくして、舞鶴では3年間展開されてきた『種は船 in 舞鶴』を各自の視点からふりかえる『船は種』プロジェクトが本格的に始動した(図3-3)。

まず取り組んだのは、「フリカエル・サイクル」の身体化であった(準備体操編)。そしてある程度そのイメージが定着した段階で、「あなたにとって『種は船』と言えば〇〇」というお題のもと、「フリカエル・サイクル」を深化させるための反復作業に入っていた。

ここでは、「つどい」実施のスケジュールの概要と、毎回参加者に記入してもらったふりかえるシートからの抜粋を掲載する。

図3-3 『種は船』と『船は種』の実施スケジュール



【開催概要】(場所はすべて yashima art port / 参加者数にはスタッフを含む)

		内容	参加人数	ふりかえるシート
説明会 (5/16 水)	19:00 ~20:00	イントロトーク	24	
第1回 (6/2 土) 準備体操編1	19:00 ~21:00	フネタネスコープをみんなで観る>	15	9
第2回a (6/23 土) 準備体操編2	14:00 ~16:00	フネタネスコープをみんなで撮る>&<観る>	13	8
第2回b (6/24 日) 準備体操編2	14:00 ~16:00	フネタネスコープをみんなで撮る>&<観る>	11	3
第3回 (7/2 月) 準備体操編3	19:00 ~21:00	フネタネスコープをみんなで撮る>&<観る>&<ふりかえる> お題「あなたにとって種船といえば〇〇」をあらかじめ各自で撮ってきてもらい、みんなで観ながらふりかえる / 3年間の記録写真をもちいた 超高速スライドショー & トーキング1	13	8
第4回 (7/21 土) 本番編1	14:00 ~16:00	お題「あなたにとって種船といえば〇〇」をあらかじめ各自で撮ってきてもらい、みんなで観ながらふりかえる	16	12
第5回 (8/25 土) 本番編2	14:00 ~16:00	お題「あなたにとって種船といえば〇〇」をあらかじめ各自で撮ってきてもらい、みんなで観ながらふりかえる / 3年間の記録写真をもちいた 超高速スライドショー & トーキング2	13	8
第6回 (9/15 土) 本番編3	19:00 ~21:00	お題「あなたにとって種船といえば〇〇」をあらかじめ各自で撮ってきてもらい、みんなで観ながらふりかえる / 「寄せ書き風・船ができるまでシート」作成ワークショップ1	13	7
第7回 (10/7 日) 本番編4	19:00 ~21:00	お題「あなたにとって種船といえば〇〇」をあらかじめ各自で撮ってきてもらい、みんなで観ながらふりかえる / 「寄せ書き風・船ができるまでシート」作成ワークショップ2	16	10
			134	65

【参加者の声】各回のつどい終了後に回収したふりかえるシート(自己調査表)の中から一部を抜粋する。

Q 今日をつどいはいかがでしたか?

◎撮影楽しい!子供のとりたいたいもの、気になるもの、大人との目線の違いが面白かった ◎写真で撮っても『あまり...』と思うけど映像は違う。ふだん気になる場所を撮るのはホント新鮮でした ◎感性が試される気がした ◎実際に映像をとれて面白かった。見られることも面白いです。すぐに評価されると満足できます ◎カメラを固定するといっても撮る人の感じで全然違う作品ができてた ◎自分のいない部分のエピソードも(聞けて)楽しかった ◎風景を動画で切り取るというのが、また不思議です ◎固定されるカメラと佇む(たずむ)ことはなんだか世間から隔離してしまった感じがする ◎普段意識から流れてしまっている風景をじっと1分間見ている。目

の前の風景は日常なんだけど、見ている自分は非日常の中
にいる気分になる。いつもの景色に新しいものを見つけたり、
流れている時間を感じたり。カメラを持って街を歩くことに意
味がある ◎自分が参加する以前の種船を知ることができて
嬉しかったです ◎（記録写真の超高速スライドショー&トー
キングに参加して）昔の写真を見て楽しかったです。一年目
の話は知らない人も多く、本当にたくさんの方が関わっている
プロジェクトだと再認識しました ◎種船の年表が楽しかった
おもいでたくさん。文字にするのは大切なこと ◎一つ一つ
の写真であれだけ話ができるとは思わなかったので楽しかった
です。その頃の様子を知らない人に、すごく伝えたいものな
なんだと気づかされました

**Q あなたが撮影したフネタネスコープについて、なぜ
そこを選んだのですか？ また撮影してみてどんなこと
を思い出したり感じましたか？**

◎夜という時間に拘った ◎舞鶴の駅 ◎日比野さん五十
嵐さんレシップの皆さん他種船に関わる人が入って出て行く場
所 ◎自分の中の思い出は何個かあったのですが、その同じ
場所で、他の人にはどんな思い出があるのか上映されたこと
によって聞きたくなった ◎種船に初めて出会ったのは自宅～
赤レンガヘマラソントレーニングをしている途中だったこと ◎
1,2,3年いつも芝生広場で作業をしている内に日が暮れて市
役所の職員さんが作業の様子をチラチラ見ながら帰っていく風
景を憶えている ◎変わった所からとりたいたし、海をメインにした
かったから。全国の各地から（船が）集まってきたと思いました

**Q 他人が撮影したフネタネスコープについて、印象に
残っているものを1つ挙げてください**

◎撮影場所：木村家の食卓 思い出したこと：お母さんの
おいしいごはん・2週間すっかりお世話になったこと ◎撮影
場所：あざみひら 思い出したこと：豊平さんがとても大変
だったこと ◎撮影場所：瀬崎 思い出したこと：出港式の
日の若干さびしい気持ち ◎ホサキさんの赤れんがへ続く道
を自転車走っているのを見て僕も同じように（その道を通
ったなあ）思い出した ◎撮影場所：芝生広場 内容：帰宅
する市役所の人 思い出したこと：何回もみたなあ、と

**Q あなたにとって『種は船』といえば〇〇』という場所
を思い浮かぶだけ書いてください。**

◎季節：夏 時間帯：昼 場所：池袋の東京芸術劇場
理由：日比野さんとはじめて会った場所だから ◎季節：秋
時間帯：昼間 場所：赤レンガ芝生広場 理由：『種は
船』にはじめて参加したところだから ◎季節：秋口 時間
帯：深夜 ◎場所：アマービレ別館 理由：当時僕は、夜
までバイトをしていて、終わった後にアマービレに差し入れ等
を持っていくと渡辺さん、豊平さん、森さん、北本さん、五十嵐さ
んがまったりしている所に入って行って午前2時をすぎたあた
りに五十嵐さんがうつらうつらし出し、その後3、4時までだ
ら話し続けるのが常だった ◎季節：暑かった 時間帯：
昼 場所：小浜 理由：彼女と種船に乗ったから ◎場所
：和田造船 理由：本当に船になったんだー！と実感した場
所だから ◎場所：舞鶴高専のプレハブ 理由：2010年、
ダンボールの船を分解して運び入れたのが印象に残っている。
2011年8月、オープンキャンパスで宣伝しに行ったから ◎
場所：上野家 理由：2011年、種衣の編み方をはじめてイ
ガラシさんに習った場所なので

海から眺める

ここでは、本プロジェクトの簡単な総括を行い、本報告を締め
くくる。

本プロジェクトにおける recip チームとプロジェクト参加者（当
事者）の取り組んだこと及びその成果物を整理した（図3-4）。
本プロジェクトの実施によって得られた成果は、第一に、現
場に関わる人々みずからの手によってプロジェクトの基礎的
資料が作成されたこと、第二に、これまでのアートプロジェクト
では必ずしも適切に扱われることのなかった、現場に関わる
人々の多様な声（種）や視点、ひいては複数の視点（部分的
な見え方）の総体を可視化する契機を拓いたことである。こ
のことは、従来のアートプロジェクトにおいて顕著だった、単
一的な視点からプロジェクトのハイライトのみに焦点をあてた
記録・調査のあり方に再考を迫るものである。

本プロジェクトは、ワークショップ型（市民参加型）アートプ

プロジェクトにおいて支配的だった従来のものの見方や視点を「反転」させ、これまで背景化されていた記録・調査という行為の可能性を前景化させる試みであるとともに、記録・調査・分析・評価・アーカイブ・ドキュメントといった各フローを有機的に連動させる仕組みを、全国に先駆けて実施するパイロットモデルとして高く評価されるものとする。

[追記]

舞鶴から新潟までの航海プロジェクト『種は船 from 舞鶴』においても、本プロジェクトが用いたフネタネスコープが活用されている。本稿は『種は船 in 舞鶴』を対象にした記録・調査プロジェクト『船は種』の報告であるため直接には扱わなかったが、別稿にて本プロジェクトとの関連性を鑑みつつ総括される必要があると思われる。

図3-4 本プロジェクトにおけるアクターが取り組んだ内容及びその成果物(1)

	記録 (record)	調査 (research)
recip (大阪)	<ul style="list-style-type: none"> ●フネタネスコープ ●写真 	<ul style="list-style-type: none"> ●鑑賞会シート ●「つどい」参加者属性アンケート
当事者 (舞鶴)	<ul style="list-style-type: none"> ●フネタネスコープ ●写真 	<ul style="list-style-type: none"> ●フリカエルシート ●寄せ書き風・船ができるまで年表

*1 / フネタネスコープおよび「つどい」については記録チーム(松本・久保田)を中心に設計を進めた。とりわけ「つどい」の実施内容やファシリテーションについては、仮説・実践・検証のプロセスを反復しながら現場に最適化させていった。

*2 / 『省察的实践とは何か』を参照。ドナルド・ショーン(著)、柳沢昌一ほか(訳)、2007、鳳書房。

*3 / remoと研究者の協働によって開発された remoscope (レモスコープ) が原案であり、その手法を応用させたのがフネタネスコープである。remo 及び remoscope については、次の報告書に詳しい。『workshop on workshop—平成22年度文化庁メディア芸術人材育成支援委託事業報告書 映像ワークショップの調査研究と実践およびインデックス作成』、2011、remo。

*4 / recip チームが「お題」や「テーマ」を決め、撮影者はそれを意識しながら記録するというパターンも実施した。

*5 / 肖像権に充分配慮することを、撮影前のガイダンスにて説明している。

*6 / ただし、フォーマット及び設問は recip チームが作成。

*7 / 携帯端末やスマートフォンに内蔵のカメラ機能、またデジタルカメラでの映像撮影も可とした。

(3-1 執筆 松本篤)

3-2 調査編

調査設計趣旨

アートプロジェクトをつくりあげた人々の関係性や記憶を、アートプロジェクトの当事者の手によって記録・調査することが、本プロジェクトの目的である。そのためには、外部者（recip チーム）が内部者（舞鶴関係者）と目的や方法を共有し、その後内部者へと受け渡すという過程をへる。その際、内部者ゆえに可能な記録調査と、外部者ゆえに可能な記録調査、この両輪を意識して進めることが肝要である。

前述のとおり記録については『種は船 in 舞鶴』つまり内部者による実施を主とし、recip チームが外部者として記録する作業は最低限に抑えられたが、調査については本チームが外部者として実施することに注力した。その方法は、関係者への個別インタビューと一般参加者アンケート調査による。

また調査は『種は船 in 舞鶴』だけでなく『種は船 from 舞鶴』にも実施した（表3-1）。TANeFUNeの航海軌跡は出航後の舞鶴の活動と無関係ではなく、事実関係を把握する必要があるとの判断による。

表3-1 調査対象と方法

	『種は船 in 舞鶴』	『種は船 from 舞鶴』
個別インタビュー	(A-1)	(B-1)
ボランティアアンケート	(A-2)	—
一般参加者アンケート	(A-3)	—

(A-1) (B-1) は第4部1章、(A-2) (A-3) は第3部1章および2章を参照。なお(A-2)の「ボランティア」という呼称は、yashima art port (以下art portと表記)に日常的に集う人々のことで、torindoに雇用されている者と区別するために本チームが用いているものである。torindo側ではかれらのことを「ボランティア」とは呼んでいない。これは『種は船』の特性を示唆する要素の一つであり、次章でも触れる。

調査内容

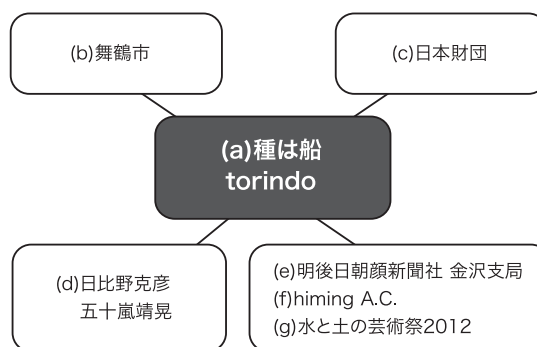
(A) 『種は船 in 舞鶴』

(A-1) 個別インタビュー

『種は船 in 舞鶴』の調査の基礎的な事実関係の把握のために実施。インタビュー項目の作成と対象者の選定は本調査チームがおこない、対象者との日程調整はtorindo側に依頼した。インタビューは吉澤、小林、辻並の3名で分担。松本、久保田、野添が同席するケースもあった。

対象者は、森真理子氏、豊平豪氏へのヒアリングを参考に関係者をリストアップ、4つのグループに分け（図3-5）、数人を選んで実施した。両氏にはファシリテーターとして同席を依頼することもあった。

図3-5



(a) torindoからは、まず森氏に、出航直後と入港後に実施。豊平氏と事務局スタッフ白石法子氏、木村衣里氏には航海中に実施した。実際に造船に関わった人々からは田中雅理氏（木工作家）、宮下敏夫氏（(株)和田造船社長）、西嶋武彦氏（設計士）、さらに art port に日常的に出入りしているボランティア6名にも実施した（当初は予定していなかったが、「つどい」を重ねるうちに、(A-2)の「ボランティアアンケート」では拾いきれない情報があると判断、一人当たり30分～1時間、別途インタビューを実施することとした）。

次に(b)の地域関係者は、舞鶴市役所の織田裕志氏、過去2年間舞鶴市文化事業団でマネージャーをしていた北本麻理氏、そして八島商店街の隣人伊庭八郎氏（マルニ金物店）に

実施した。(c)では『種は船』に3年間連続して助成している公益財団法人日本財団(以下、日本財団と表記)の青木透氏、(d)アーティスト日比野克彦氏、五十嵐靖晃氏に実施した。

以下、本チームがリストアップした対象者の一部である。実施者を太字で記す。インタビューテキストは第4部1章を参照。

■実施時間：通常1人1回あたり30分～1時間、最長は約2時間。*印は2回実施

■公開方法：文字おこしをおこない、本人に公開を前提としたテキストの加筆修正を依頼

■候補者(敬称略)、うち太字はインタビュー実施

(a) torindo：[torindo] **森真理子***(代表)、**豊平豪**(事務局)、**白石法子**(広報)、**木村衣里**(秘書)／[造船関係者]**田中雅理**(木工作家)、**土本**(設計士)、**西嶋武彦**(設計士)、**市井**(大工棟梁)、**上田**(看板屋)、**福原**(表具屋)、**宮下敏夫**(和田造船社長)、**久保**(和田造船)、**小山**(和田造船)、**江川**(FRP加工技術者)、**高岡**(FRP加工技術者)／[art port 関係者]：**井上恭介**、**井上奈美**、**岩田都代実**、**岩田大樹**、**依田琢磨**、**浦岡雄介**、**新谷友尚**、**菅井章子**、**中島正夫**、**永野篤史**、**西野正純**、**西村直子**、**西村茉莉子**、**藤田むつみ**、**藤田ねね**、**保崎はるや**、**保崎みちこ**、**細川果苗**、**細川海路**、**本田能武頭**、**南こうき**、**山口陽子**、**山口晶**、**山口真由**、**山口颯太**、**由里奈未**、**渡辺由徳**

(b)舞鶴市：[地域関係者]**織田裕志**(舞鶴市役所担当者)、**吉田雅樹**(もと舞鶴市役所担当者)、**北本麻理**(もと舞鶴市文化事業団)、**馬場英男**(赤煉瓦倶楽部事務局長)、**青木信明**(舞鶴市民新聞)、**道又隆弘**(京都新聞舞鶴支局長)、**堀川敬部**(もと朝日新聞舞鶴支局)、**平畑玄洋**(もと朝日新聞舞鶴支局)、**伊庭八郎**(マルニ金物店)

(c)日本財団：**青木透**(海洋安全教育グループ)

(d)アーティスト：**日比野克彦***、**五十嵐靖晃**

(A-2) ボランティアアンケート(2種)

■対象者：「つどい」参加者

■実施時間：通常1回あたり10分程度で記入

■公開方法：公開を前提としている旨了承を得て、記入を依頼

当事者の声を「つどい」でのアンケート調査(ふりかえるシート／自己調査票)によって収集。3-1および第2部2章を参照。同時に「つどい」参加者の個人属性(年齢、性別、職業、居住地)を問い、集計した。結果は第3部1章を参照。以下にその概要を示す。

◎回収枚数：18

◎参加者の年齢は、20歳代、30歳代、40歳代がほとんどを占めるが、10歳代と50歳代の参加もあり、幅広い年齢層の人々が参加していることがうかがえる。

◎参加者の性別は男性が7割を超えた。

◎職業は「正社員・常勤職員」が最も多く「自営業・自由業」「パート・アルバイト」「学生」と続く。

◎住まいは舞鶴市内がほとんどを占めた。

(A-3) 一般参加者アンケート

■対象者：5/3～6造船ワークショップ、5/19出港式への一般参加者

■公開方法：公開を前提としている旨了承を得て、記入を依頼

ワークショップと出港式において一般参加者アンケートを実施。本チームが作成したアンケート用紙たたき台を torindo 関係者とブラッシュアップし、当日は専任スタッフを置いて配布設置回収を実施。回収後、recip チーム小林が、総合データと日付ごとで集計した。結果は第3部2章を参照。以下、概要のみ示す。

◎回収枚数：148

◎参加者の年齢は、30歳代、40歳代、20歳代の順となっているが、10歳未満から80歳代まで幅広い年齢層の人々が参加している。

◎参加者の性別は女性の割合がやや多い。

◎職業は「正社員・常勤職員」が最も多く、「主婦・家事手伝い」「学生」「自営業・自由業」と続く。

- ◎住まいは、舞鶴市内が最も多く、県外が次に多い。
- ◎「初めてまいつるRBの活動に参加した」と答えた人が約7割を占めた。
- ◎ワークショップ／出港式を知った方法は、「たまたま通りかかった」が最も多く、「友人・知人」、「舞鶴市の広報物」「ポスター・チラシ」と続く。
- ◎ワークショップ／出港式に参加した理由は「おもしろそうだったから」が最も多く、「『種は船』という企画に興味がある」、「アーティストが好き」「作品づくりが好き」と続く。
- ◎ワークショップ／出港式に参加した感想は、「よかった」「どちらかといえばよかった」を合わせて9割を超える。また、自由回答欄からの一部抜粋は以下のとおり。

問3)「参加してみていかがでしたか」についての「そう思った理由」(一部抜粋)

子どもが船に興味が出ました。／新しい出会いに期待して／何年ぶりかで絵を描きました／自由に子どもも大人も参加できることがとてもよいと思います。／もう少し参加人数があればもっと盛り上がりただろうと。／海を手作りの木造船で超えるという意気がよかった。／人とのふれあいができた。／知らない世界に出会えました。／日比野さんに会えたこと。／家族で一つの事に参加できていい思い出ができた。／役に立てれば、よかったと思います。／大きなイベントの小さなカケラになれた気がするから。／とても良い企画で年齢を問わず参加できていいと思います。／子供達がノリノリで絵をかいてくれました。／天気よくて。船が動くのって楽しい。のってみたい。／本当に船ができてた!／スタッフの皆さんが楽しそうで活気があって、元気をもらいました。／天気が良くて、船に夢を感じられたから。

◎その他、ご意見ご感想の一部抜粋は以下のとおり。

問4) その他、ご意見ご感想がありましたら、お書きください。(一部抜粋)

たまたま通りかかったが、コンセプトに興味もあり、面白い試みで参加できてよかった。／また企画を楽しみにしています。／地方では、芸術文化に接する機会が少ないので子どもの刺激になってくれたらと参加しました。続いてほしいです。／今後船がついたかどうか知りたいです。／大勢で大きなものを作るのが楽しかったです。／できれば、最寄り駅とか。赤レンガパーク芝生がどこかわからなかった。初めての人のために。

／この企画についてもう少し明確でわかりやすい説明があれば・・・。／船を見たときは本当に動くのとおもいました。新潟まで無事に着くこといってます。／新潟まで遠路航海を頑張ってください。TANeFUNeが新たな種となって新しいきづなを作ってください。／僕ものりたかったです。僕の方まで楽しんでってください。帰ってきたら次のせて下さい。／一生懸命やってきた話(トーク)を聞いて感動しました。何事につけどこかしらけている自分はダメだと思いました。／ちゃんと浮かぶか心配だったけど大丈夫でよかった。今からの道のりが安全で楽しい航海になりますように。／がんばれ、沈むな!／思ったより小さかった!

(B)『種は船 from 舞鶴』

(B-1) 個別インタビュー

寄港地の(e) 明後日朝顔新聞社金沢支局と(f) himingA.C.、および入港地である(g) 水と土の芸術祭2012において、関係者インタビューを実施した。(g)は時間の都合上、グループインタビューとなった。

■実施時間:通常1人1回あたり30分～1時間(ただし新潟は一人10分ほど)

■公開方法:文字おこしをおこない、本人に公開を前提としたテキストの加筆修正を依頼する。

■対象者(敬称略):

(e) 明後日朝顔新聞社金沢支局(喜多直人)

(f) himing A.C.(高野織衣、平田哲朗)

(g) 水と土の芸術祭2012(五十嵐政人、五十嵐奈穂子、荒井直美、佐藤浩子)

さまざまな「語り」の顕在化

アンケート調査自体はこれまで舞鶴側では実施したことがなかったため、5/3～6の造船ワークショップが初の試みとなった。ボランティアスタッフ属性アンケート調査、および一般参

加者アンケート調査の結果を、他の地域アートプロジェクトの調査結果と比べることができれば、『種は船 in 舞鶴』を構成するメンバーの特徴が明確になると予想される。

また一般参加者アンケート調査は、ボランティアスタッフの中から任命された数名の担当者が配布と回収にあたった。声かけにより一定数は回収できたものの、ワークショップ自体の運営と作業が大変になるとどうしてもアンケート対応は後手に回り、回収率は下がった。一般参加者アンケート調査の意義については、実施後に共有できた部分もあったが、事前にスタッフ間で十分に共有することができればなおよかった。なおアンケート調査は継続し蓄積することで見えてくるものがあるため、その目的と意義が再確認された場合は、継続されることが望まれる。

次に、インタビュー調査について。のべ27名の人々が、『種は船』との関わりを語り後日そのテキストを確認するという作業は、言説を通して「記憶の海へ」漕ぎ出す行為だったといえる。テキストの中では、各個人がそれぞれ持っている『種は船』に関わる文脈、根拠、動機、そして経過や結果などが語られている。さらにより根本的なところでいえば、この膨大なインタビューテキストは、本プロジェクトが目指した「アートプロジェクトを構成する多様な人々の『語り』の顕在化」であるとともに、それぞれの日常生活／人生の中のアートプロジェクトのありようを紡ぎ出したという意味で、アートプロジェクトをめぐる言説の「図と地の反転」に成功したともいえるだろう。

また今回、本チームは外部者による調査に注力したが、torindoでは2011年11月に1回、2012年は航海中に2回と航海後に1回、豊平氏による五十嵐氏へのインタビューが実施されていた。必ずしも事前の包括的な設計があって実施されたものではないため、対象者が十分とはいえないが、内容は3年にわたって築かれた関係性ありきの濃密なインタビューとなっている。今回、そのテキストも本チームの成形により、本報告書に掲載することとなった。これによって、前掲の図3-4に要素が加わり、図3-6のようになる。

図3-6 本プロジェクトにおけるアクターが取り組んだ内容及びその成果物(2)

	記録(record)	調査(research)
recip (大阪)	●フネタネスコープ ●写真	○個別インタビュー ○一般参加者アンケート ●鑑賞会シート ●「つどい」参加者属性アンケート ●フリカエルシート ●寄せ書き風・船ができるまで年表
当事者 (舞鶴)	●フネタネスコープ ●写真	○個別インタビュー

表3-2に、調査の今後の展開可能性を示す。今年度はインタビュー対象から漏れた人もいること、また寄港先での調査は最低限のラインとなったことから、今後これらの声を拾っていくというのも、興味深いプロジェクトとなるだろう(A-1、ないしはB-1の拡充)。あるいは、『種は船 from 舞鶴』の寄港先でもボランティア／一般参加者アンケート調査をおこなうことで、舞鶴の調査結果との比較検討も可能となる(B-2、B-3の実施)。

表3-2 調査対象と方法、今後の展開可能性

	『種は船 in 舞鶴』	『種は船 from 舞鶴』
個別インタビュー	(A-1)	(B-1)
ボランティアアンケート	(A-2)	(B-2)
一般参加者アンケート	(A-3)	(B-3)

そして、3-1-4の追記にも記されているように、『種は船 from 舞鶴』でもフネタネスコープの手法を中心とした『船は種』プロジェクトの援用が可能である。

(3-2 執筆 吉澤弥生)

4

記録と調査のプロジェクト自己検証

以下、本プロジェクトを検証する。設計段階、実施段階、実施後、それぞれの段階で向き合った問題を【複合プロジェクト】、【recipチーム】の順にふりかえる。

4-1 設計段階(4~5月)

【複合プロジェクト】

『船は種』プロジェクトは、4つの団体による複合プロジェクトの一部である。主催である『種は船』(torindo)に、「リサーチプロジェクトの実践」(TARL)、「リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践」(P+ARCHIVE)、そして「記録と調査」(recip)がかかわる。このうち recip のクライアントは torindo と TARL の2つで、それぞれに対し最終成果物を提出する。

一方で、「アーカイビング実践」と「記録と調査」との関係ははっきりしなかったが、出航前の5月上旬、直接的な共同作業ではなく、それぞれが平行して実施されるとの整理がなされた。

【recipチーム】

まずは開始時期である。本プロジェクトは3年間のプロジェクトの3年目に現場に入った。つまり、現在進行形のプロジェクトに対し短期間で設計実施を行うことと平行して、すでに終わっている2年間の記録と調査の設計実施にも取り組まねばならない。文化事業やアートプロジェクトの記録・調査・分析

を行う際は、その開始前から設計にとりかかることがほとんどであり、その意味で初の試みとなった。

次に実施スケジュールについて。『種は船 in 舞鶴』『種は船 from 舞鶴』ともにスケジュールが読めないため、本チームのスケジュールを立てることは困難だった。これは作業内容にも影響する難題だったが、臨機応変に動けるメンバーが動くという形で対応することとした。

さらに、本チームの拠点である大阪と、現場(舞鶴と各寄港先)との物理的な距離も、スケジュール調整の困難、移動時間の増加、交通宿泊費の増加という点で、大きな課題となることが予想された。

4-2 実施段階(5~10月)

【複合プロジェクト】

『本チームが最優先したのは、『種は船 in 舞鶴』の現場に赴き、関係者と丁寧に関係を築きながら記録調査作業を進めること、つまり舞鶴での3年間の記憶と記録を紡ぐという作業に注力することであった。その中で徐々に舞鶴関係者と情報のやりとりも密になっていった。一方で「リサーチプロジェクトの実践」チームとの情報共有は後回しにならざるをえなかった。またこの複合プロジェクト専用のMLが作成されたり、全体会議の調整なども試みられたが、舞鶴、東京2つ、大阪を合わせた4チームが、この複合プロジェクトの全体像とそれぞれの

役割を現在進行形で共有するのは難しかったように思われる。

【recipチーム】

記録／調査のチームがそれぞれ現場に入り、設計図（理想）を現場に落とし込む作業を随時進めていった。調査チームの作業量は予測できたが、記録については実験的な面が強かったため作業量の予測が難しく、したがってチーム全体のマネジメントも「走りながら考える」状況が続いた。また移動時間、滞在期間を考慮した全体および個々のスケジュール調整も容易ではなかった。交通宿泊費、機材費は不可欠な経費だったが、全体の作業量が見えない段階でもろもろの支出の判断をすることも難しい問題だった。

チーム内での情報共有は、日常的にはMLで行った。一方で、活動ログMLを別途作成し、日々の個別作業を投稿、蓄積させていくという方法も試みたが、こちらは続かなかった。

4-3 実施後（10～12月）

【複合プロジェクト】

神田コミュニティアートセンタープロジェクト『TRANS ARTS TOKYO』（2012年10月21日～11月25日での「種は船アーカイブ準備室」展）のトークセッションにおいて、複合プロジェクトとしての情報共有と今後の見通しを話し合うことができた。ただこの展示は、本チーム内のほとんどの現地作業終了後（したがって予算配分決定後）だったことから、現地対応を東京側のスタッフにお願いすることとなった。

【recipチーム】

torindoに納品するリーフレット、TARLに納品する報告書、ともに年明け早々の完成をめざし、執筆を進めている。

また、2013年1月19日から舞鶴において開催される「種は船」の展示プロジェクト（別事業、別予算）に、本チームの松本・久保田がかかわることになった。さらに recip から専門の技術者数名を加え、12月から機材や展示内容などについて話し合いと作業を進めている。

以下、主なメンバーによる『船は種』の「ふりかえり」を記す。

氏名

- 1 本チームでの役割
- 2 試みたこと、困難だったこと、実現できたことなど

久保田美生

- 1 舞鶴で過去三年間の活動に関わった方々が、当時の記憶や思いをふりかえることが可能となるための記録手法（フネタネスコープ）と場の設計（つどい）を松本篤氏と行った。
- 2 活動内容の情報収集を主目的にするのではなく、活動に関わられた個々人の都度の記憶や思いがひきだされ、そこに対話が生まれ、そこからまた様々な方々の記憶が語られることを大切に考えた。「フネタネスコープ」という映像メディアがそのような場をもたらすだろうとの直感はあったが、毎回のつどいの充実は舞鶴の方々が培ってこられた関係によることも大きいと感じている。手法と場の設計は、理論だてと場の実践を何度も往還しながら刷新するプロセスを踏むことができた。直感と問いをなげつづけ徹底的に話し合う貴重な経験をさせていただいた。

小林瑠音

- 1 私が担当させていただいた主な役割は、インタビューとイ

インタビュー文字おこしそしてアンケート調査のデータ集計の3つでした。現地に入らせていただいたのは、舞鶴に2回と新潟に1回のみで、現場との密着度は低かったものの、五十嵐さんや豊平さんといったコアメンバー、木村さん、白石さんなど事務局メンバー、そしてボランティアのみなさん、商店街の方々など、多様なバックグラウンドの方々のお話を聞くことができ、客観的な視野から本プロジェクトを俯瞰できたのではないかと思う。

2 私はこれまで、アンケート調査や統計分析など、定量的な手法を用いて、プロジェクト評価に関わるが多かったのですが、今回、インタビュー調査やレモスコープなど、記憶や記録をテーマにプロジェクト評価にとりくむという、私にとって新しい定性的方法論を試みることができ、大変勉強になりました。今後この結果をどう分析しまとめるのかということについても興味があります。

辻並麻由

1 チーム全体のマネジメントとして予算管理、スケジュール管理、会議・出張記録のとりまとめ、情報整理などを担当した。調査関連項目ではインタビューの実施(1名)、文字おこし(4本)、記録撮影(出港式など)を行った。報告書関連では、舞鶴での3カ年の活動をまとめた「種は船」リーフレットの作成においては、編集協力、進行管理などを担当。また、本チームが作成する活動報告書の作成においては、進行管理、情報整理(2章の一部)、出力や納品用データ作成を担当した。派生的に、本業務ではなく、「クルー」として富山県のTANeeUNe航海に参加し補助業務を行う機会を得た。

2 チームとして困難だったのは、リサーチプロジェクト全体が複雑な構造だったために本チームの役割(業務範囲)が明確になるまで混沌としていたこと。しかし、プロジェクト全体が実験であったからこそ、新たな「試み」に可能な限りチームで取り組むことができた。一方、航海中は寄港先と大阪の物理的な距離が大きく、時間的にも予算的にもきめ細やかに現地へ足を運べなかったのは残念である。個人としては、できるだけゆるやかなマネジメントを試みたが、かなり個性的なメンバーの集まりであり、内部調整に苦心することが多々あった。しかし、実験であることは楽しめたと、「クルー参加」などよい意味でグズグズの関係性ができたことは収穫だった。

野添貴恵

1 データ管理、ML管理、「つどい」関連ツールのデザイン

松本篤

1 記録の設計実施、本報告書3-1執筆

渡邊太

1 アンケート調査監修

吉澤弥生

1 ディレクター：torindo・TARLとの連携調整および本チームの方針決定と内部調整。本報告書の執筆(2の一部と3-1のぞく)。調査：インタビューの準備、実施、文字起こし、成形および本人確認の調整。アンケート作成、実施、回収、一部集計。

2 4-4 総括を参照

4-4 総括

まず記録について。今回は「内部者による記録」に注力し、3-1にあるような成果を残した。一方でチーム内では、ドキュメント制作を意識した「外部者(=本チーム)による記録」作業をどの程度実施するか、話し合うことがよくあった。ドキュメント制作は今回の業務の外にあるし、実際、torrindo側が委託した映像ドキュメント制作担当者も別にいる。ただ、複数の場でできごとが生じ進行するアートプロジェクトの性質上、「今撮っておかなければ何も記録が残らなくなってしまう」、または経験上「いずれ他者に伝えることを考えたときに、それなりのクオリティの映像が必要なのではないか」といった思いがつねにあり、「当事者による記録」とはいえその線引きの難しさと葛藤はつきまとった。その意味でも、事前に映像ドキュメント制作担当者と本チームとが、それぞれの目的と方法について、および役割分担がありうるならその方法について、話し合う余裕があればよかったかもしれない。

次に調査について。アンケートとインタビューともに recip でこれまで実施してきた方法を援用しつつ、調査チームだけでなく他のメンバーがインタビュアー／文字おこしと臨機応変に対応したり、現地入りしていた記録チームがファシリテートの役割を果たしたことで、調査は全体的にスムーズに進んだ。これらのデータは、事業評価が必要となる関連組織（3章の図3-5参照）にとっては、評価軸を作成するための基礎資料となるだろう。一方で興味深いのは、現時点で、調査チームの収集したデータは「リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践」（P+ARCHIVE）のアーカイブ対象とはなっていない点である。今後、こうしたエスノグラフィ的資料が評価チーム「リサーチプロジェクトの実践（TARL）」によってどう読解されていくだけでなく、アーカイブ対象としてどう位置づけられていくのかにも注目したい。

続いて、記録と調査の関係について。「できごとを残す」記録と、「事実を明らかにする」調査、これらは線的なグラデーションのもとでとらえられる。3章の図3-6では線で区切られているが、じっさいその境界線近くに位置する「記録的調査」もしくは「調査的記録」ともいべき作業も発生した。図内に示された「寄せ書き風・船ができるまで年表」がそれにあたるだろう。これは「つどい」のお題として設定されたものだが、作成された年表は、参加者がその日に思い出したことが記された資料であると同時に『種は船』の事実関係を再構成したものとなった。記憶を掘り起こすための「つどい」という場から、このような記録／調査の境界上に位置する資料が生み出されたことは興味深い。

同じような境界線上の面白さは、同図の「内部者／外部者」についてもいえる。実際、本プロジェクト進行中には、舞鶴入りすることの多かった松本が商店街の夏祭り「夜の市」での art port の企画を担当したり、久保田・辻並も本プロジェクトとは別業務として航海中にクルー参加したりと、外部者でありながら内部者のような位置に立つ事態が生じていた。外注された仕事を受け遂行している以上はもちろん外部者であるわけだが、別の視点からみれば『種は船』関係者＝内部者と映る。境界線上に位置することでえた二重の視点は、それぞれ

の業務に効果的なフィードバックをもたらしたのではないかと。

11月9日のフォーラム（トークセッション3:「船は種」の手法、その2～記録・調査の実践）で、森真理子氏が興味深いコメントをしていた。「recipチームが『外部者として現場に入る』と言うとき、舞鶴では『内部者って誰?』ということをおぼろげをえなくなる」といった趣旨だった。3-2でも述べたように、torindo では art port に日常的に集う人々のことを「ボランティア」とは呼んでいない（本チームは作業上「ボランティア」と呼んだが）。そう名指すことで個々の役割とメンバーシップが固定化することを避ける意図があるのだろう。そして、インタビューを通してわかったのは、art port 関係者にとってこの『種は船』のプロジェクトは、それぞれが自ら意味づけのできる「居場所」であり、また金銭といった対価とは別の「役割」を見いだせる場所として機能していることだった。明確な境界線を引かずにある種のグレーゾーンを担保したまま、組織というよりは流動的な運動体としてプロジェクトを運営するという方法によって、上述のような参加者の主体的な意味づけが可能となっているといえよう。

最後に、記録調査の主体と目的について。本プロジェクトでは、「誰が／何を／何のために」記録調査するのかをつねに意識しながら作業を進めた。たとえばフネタネスコープは、「『種は船』関係者が／映像を／『つどい』でみんなで観て話すために」撮ったものである。したがって、たとえば「種は船アーカイブ準備室」展でフネタネスコープを上映した際には、ふらりと訪れた一般の人が見ても意味のわからない映像も出てくる（もちろん中には一般展示にふさわしい説明的な映像や、展示に耐えうる質をもった映像もあるが）。展示や映像ドキュメントといったアウトプットのためには、明確な目的のもと計画に沿って記録を残すことが必要だということがよくわかる。だが一方で、あるコンセプトのもとで撮影された映像が、そうした文脈から切り離されたとき、鑑賞者によってどのような意味づけがなされていくのかという、開かれた映像もしくは映像そのものがもつ力というテーマも興味深い。

作品やプロジェクトだけでなく、記録、調査、アーカイブ、ドキュメント、評価、展示といった営みをも含めた「表現」の背後に

は、必ずそうした「誰が／何を／何のために」という政治が潜んでいる。だが、ことアートの世界では、そのことへの関心は薄くなりがちである。逆にいえば「誰が／何を／何のために」を考えないまま、記録、調査、アーカイブ、ドキュメント、評価、展示という表現がつくられがちということでもある。この記録と調査のプロジェクトは、そうした現状に一石を投じることができたのではないだろうか。

本プロジェクトの目的は、アートプロジェクトの当事者の手によって、さまざまな関係性や歴史、人々の記憶を前景化させることを主眼に置いた記録と調査の設計を行い、実際に検証することであった。その結果、創造的行為としての記録・調査の実験として、あるいはアートプロジェクトにおける作家中心性を脱構築する試みとして、一定の成果を残したといえる。さらにこれは、地域のアートプロジェクトが個別の文脈でいかに評価され、どのようにアーカイブされていくのか、言い換えれば美術の「正史」とどのような関係を結ぶのか、あるいは結ばないのか、といった課題を見定めていくための基礎資料にもなっている。ここから先の課題は、複合プロジェクトの中で考察／実践していければと思う。

(4章執筆 吉澤弥生)